



ヒッポファミリークラブ News Letter LMP Special Edition

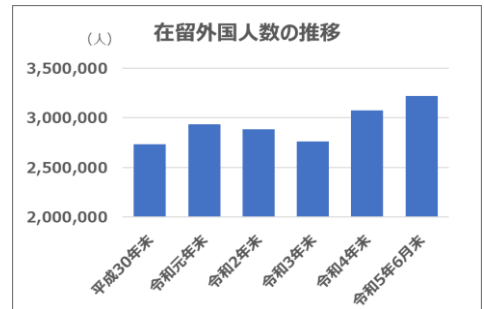
- 過去最高を更新する在留外国人、日本の生活に孤独を感じる人が顕在化
- 世界に向かって羽ばたく、多言語プレゼンターの「今」に注目
- 多言語プレゼンテーション大会の第10回記念に寄せて
東京大学大学院教授 酒井邦嘉（言語脳科学）
- 第10回記念『多言語プレゼンテーション大会』が開催されました

過去最高を更新する在留外国人、日本の生活に孤独を感じる人が顕在化

日本で暮らす外国人が増え続けています。出入国在留管理庁の発表によると、令和5年6月末時点の在留外国人人数は322万3,858人。海外との往来が再開した後、令和4年12月末の調査との比較で約15万人増加し、過去最高を更新しました。在留資格別の上位では、永住者が1.9%増の88万人、技能実習が10.2%増の36万人、技術・人文知識・国際業務が10.9%増の35万人で、「日本で働く外国人」が増えています。

少子高齢化による労働力不足が深刻化し、私たち日本人の生活は外国人の働き手の支えなしには成り立たないと言われています。「外国人との共生社会」の実現に向けて、国もさまざまな施策を打ち出していますが、現状はどうでしょうか。

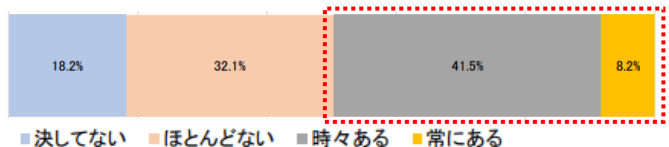
出入国在留管理庁では、日本に住む外国人が抱える生活上の問題点を把握するため、令和2年度から『在留外国人に対する基礎調査』を実施しています。その最新の調査では、約半数が「人との付き合いがない」「取り残されている」「他の人から孤立している」、といった、何らかの孤独感を持っている、という結果が出ました。



出所：出入国在留管理庁
「令和5年6月末現在における在留外国人人数について」

あなたは自分には人との付き合いがないと感じることがありますか。（1つだけ回答）
あなたは自分が取り残されていると感じることがありますか（1つだけ回答）
あなたは自分が他の人から孤立していると感じることがありますか（1つだけ回答）

出所：出入国在留管理庁「令和4年度 在留外国人に対する基礎調査」報告書



以下は、同調査に寄せられた日本に13年住む40代女性のコメントです。

日本に住んで 13 年になります。日本の文化、住みやすさ、安全さ、日本食が大好きです。日本語も問題なく、普通に日本人と話ができます。言いたいことを言えますし、特に困ったことはありません。周りは皆親切な人です。でもそれでも孤独さを感じることがよくあります。日本人はどんなに親しくても本当の意味で受け入れてくれないからです。「彼女は外国人だ」という意識が強く残っていると思います。つまり、「外の人だから、日本人を100%わかることはないでしょう」と言うことを感じます。情緒的なことを言っているかもしれませんが、この考えがこっちの頭に根付いているから日本はいつまでたっても外国人にとっては住みにくい国になってしまいます。日本は移民国として一番避けた方がいい国として知られていることは事実です。日本を本音で愛していないと長く住めないです。

『令和4年度 在留外国人に対する基礎調査－調査の概要－』より引用

「外国人との共生社会の実現」に向け、外国人に対する調査はありますが、日本人への調査はなかなか見つかりません。異なる文化に対する日本人の意識も正確に把握して社会にフィードバックする必要があります。

世界に向かって羽ばたく、多言語プレゼンターの「今」に注目

ヒッポファミリークラブが毎年開催する「多言語プレゼンテーション大会（LMP）」では、多言語に囲まれて育った若者たちが、自らの体験に基づく社会へのメッセージを3つ以上の言語を使って発信します。過去の大会で活躍し、自らの夢の実現に向けて頑張っている、プレゼンターの現在の姿を紹介します。

フランシスコ ハビエル ニコラス フェリックスさん（29歳） 2016年・第3回大会 大学生・社会人部門 ゴールド賞

子供の国際感覚を養いたいと考えていた父親の勧めで、15歳の時にメキシコのヒッポファミリークラブに参加。2011年から1年間、日本の高校に留学し、その後メキシコ国立自治大学（UNAM）に進む。2015年10月から1年間、文部科学省の国費留学生として香川大学で学び、2018年に上智大学へ交換留学。UNAM卒業後は約4年間JICAメキシコ事務所に勤務し、2023年10月から英オックスフォード大学で修士課程を履修中。外交に関する研究に取り組んでいる。



2016年2月、文部科学省の国費留学生として香川大学に在籍していたフランシスコさんは、ヒッポファミリークラブの多言語プレゼンテーション大会で「世界中の人々の架け橋となるような外交官になりたい」と将来の夢を語りました。

フランシスコさんが国際関係に興味を持ったきっかけは、高校2年の時に参加したヒッポファミリークラブのイヤーロングプログラム（高等学校交換留学）。将来はエンジニアになることを想定していましたが、日本でホストファミリーやいろいろな人と出会い、親交を深めるなかで、将来の新しい夢が見つかったそうです。大学は思い切って進路を変え、政治社会学部の国際関係学科に入りました。

21歳の時に参加した多言語プレゼンテーションのタイトルは「ことばの海の中で自分の将来見つかりました」

今ではオックスフォードの学生仲間の日本人とも難なく日本語でコミュニケーションできるフランシスコさんですが、高校留学で初めて日本に来た時は、ことばや生活習慣の違い

に大きな戸惑いを感じていました。留学先は埼玉県川越市にある私立の男子校。環境に慣れて友達が増えるにつれ、日本の生活はどんどん楽しくなってきましたが、最初の頃はクラスメートが皆おとなしくあまり話しかけてくれないので、寂しい思いをしたそうです。

香川大学での1年間は人生最高の時間だったと振り返るフランシスコさん。2回目の日本で気持ちに余裕もあり、世界各地の留学生とネットワークを築いたことが、今につながる一番の財産です。ヒッポファミリークラブで多言語活動に参加していた経験を活かし、彼らの母語で挨拶から始めることで、すぐにうちとけることができました。フランクで話し好きな人々が集まるヒッポファミリークラブは、例えば日本に住む外国人のセーフティスペースとしても機能できる可能性を秘めていると言えます。

修士課程を終えた後について、今は外交官にこだわらず少し視野を広げて将来を考えています。母国のためだけでなく、問題を抱える人々を現地で一緒に解決するような国際機関で仕事をしてみたいそうです。世界中をつなぐ架け橋に。フランシスコさんの夢の実現はもうすぐそこまで来ています。

青井 勇輝さん（29歳） 2019年・第6回大会 大学生・社会人部門 ゴールド賞

母親に伴われ生後7ヶ月でヒッポファミリークラブに参加。5歳の時に家族で行った韓国ホームステイが初海外。ロシア（小5）、カナダ（中1）、フランス（高校交換留学）など、国際交流を重ねる。東京農工大学で植物を研究し大学院に進む。その後、フランスの国立農業・食糧・環境研究所（INRAE）で農学博士号を取得。現在は、一般社団法人JAD（日本農業開発）とWeb3分野のスタートアップ企業のプロジェクトに参画している。



2019年3月10日（日）、東京ビッグサイトの国際会議場には1,000人を超える聴衆を前に、6つの言語を駆使してプレゼンテーションに臨む青井さんの姿がありました。自分にしかできない、誰にでもわかりやすいパフォーマンスを実現するため、研究を重ねて登った、多言語体験の集大成としての大舞台でした。



6つの言語を使ったプレゼンテーション。タイトルは「Nature×Nurture -多言語環境が心地いい！-」

当時、東京農工大学の大学院生だった青井さんの研究テーマは植物の成長をつかさどる植物ホルモン。プレゼンテーションでは、植物が成長するときに示す「ゆらぎ」を自身が育ってきた多言語環境になぞらえ、植物はまわりの環境をなるべく経験して成長すること、そして、植物にとって自然なことは人間にとっても自然なのだと語りました。

フランスの研究所で農学博士号を取得した後、2023年10月に社会人としての生活をスタートさせた青井さんは、現在、植物と多言語、二つの得意分野を活かして複数のプロジェクトに携わっています。農学・化学の専門家として役員を務める一般社団法人JAD(日本農業開発)では、廃棄されたプラスチックやタイヤから精製される油を農業や漁業で活用するプロジェクトが進行中。CO2を削減し持続可能な農業に大きく貢献することが期待されています。Web 3 分野のスタートアップ企業では、ヒッポファミリークラブで身に付けた多言語を活かし、製品のプロモーションに携わっています。

現在のプロジェクトをいち早く軌道に乗せることが当面の目標ですが、将来については、今の立場や場所にこだわらず、いろいろなことに興味を持って挑戦していきたい、という思いを持っています。そのひとつが教育分野。具体的な時期は定めていませんが、自給自足の生活を送りながら、「寺子屋」のようなところで、それまでに培ったことを子どもたちに伝え、育みながら、その時々で必要とされる役割を果たしていければ、と考えています。

在留外国人だけでなく、性的マイノリティや障害者など、多様性の享受が求められる現在の日本。大人になった今でも、異なる文化や考えを持つ人に自然に興味を持てるのは、生まれた時から参加してきた多言語活動によるものではないか、と青井さんは言います。日常生活の中でさまざまな国や地域のことばに自然に浸る環境が、自由に拓かれた心を育んでくれたのだと感じています。

「ひとつの場所にとどまらず、豊かな環境を自分から作り出し、飛び込んで未来を拓き続けたい」。プレゼンテーション大会で語ったメッセージそのままに、青井さんの挑戦はこれからも続いていきます。

「ひとつの場所にとどまらず、豊かな環境を自分から作り出し、飛び込んで未来を拓き続けたい」。プレゼンテーション大会で語ったメッセージそのままに、青井さんの挑戦はこれからも続いていきます。

多言語プレゼンテーション大会の第10回記念に寄せて

東京大学大学院教授 酒井邦嘉（言語脳科学）



ヒッポファミリークラブの多言語プレゼンテーション大会は、若者がホームステイや留学で得た体験を言語化し多くの人に伝える場として、さまざまな活動の中でもユニークな役割を果たしています。若者によるスピーチコンテストは数あれど、3つ以上の言語を1つの言語のようにスイッチしながら行うものは唯一無二でしょう。表面的にはいろいろな言葉に聞こえても、脳から見れば人間の言語は1つしかありません。自らの体験を通して複数の言葉を語るのとは、とても貴重な機会だと思います。

自分の殻を破り広い世界へ飛び出そうとする姿に、いつも勇気をもらっています。それぞれのできごとや受け止め方はさまざまですが、海外での体験は特に鮮烈で、その蓄積が多くの人と共有できる確かな「経験」となります。回を重ねるごとにプレゼンテーションの技術も向上してきましたし、特にコロナ禍と重なるこの数年は、広く社会一般の問題に対しても意識を向ける姿勢がはっきりしてきたと感じます。

さまざまな地域で世界の均衡が崩れ、平和を維持することの難しさが浮き彫りになっています。相手に対するリスペクトを表すには、その人の言葉を使うのが一番です。ヒッポファミリークラブは、「人はみな同じ」という思いを大切にしながら、多言語活動やホームステイを通じた国際交流を実践しています。国境を越えて大きなファミリーになるという理想を世界に向けて発信することは、とても大切なことです。

略歴：1964年東京生まれの北海道育ち。東京大学大学院理学系研究科博士課程修了。

1996年マサチューセッツ工科大学客員研究員を経て、2012年より現職。言語という究極の難問に脳科学の視点から挑んでいる。2021年3月、マサチューセッツ工科大学のスザンヌ・フリン教授と（一財）言語交流研究所による共同研究の成果「多言語習得の脳科学的効用」を発表。2015年の開始当初から多言語プレゼンテーション大会の審査員を務め、大会の企画運営に対する助言も行っている。

「ことばの体験」を生かし3つ以上の言語で社会へメッセージを発信 第10回『多言語プレゼンテーション大会』が開催されました



オンライン公開予選の参加者も交えた集合写真

2024年2月4日（日）、LINE CUBE SHIBUYAで、3つ以上の言語を使った多言語プレゼンテーション大会『LEX Multilingual Presentation for Youth Tokyo（以下略称、LMP）』の本選が開催されました。当日は8つの国と地域の留学生などを含む34人の若者が登壇。会場で観客が見守るなか、自分自身の「ことばの体験」に基づく社会へのメッセージを5分間のプレゼンテーションで伝えました。審査の結果、マレーシアから山形県の大学に留学中のNur Syafiqah Amira Leeさんと、マレーシアで大学院に通う李 欣洁さんが最優秀のゴールド賞を受賞しました。

ヒッポファミリークラブでは、多言語教育やグローバル人材を育む環境への理解を深めていただくため、さまざまなイベントを開催しており、その代表となるのがこのLMPです。ヒッポファミリークラブの活動に参加して育った若者が、自らの多言語体験を世の中に伝える場として2015年1月に開始されました。これまでにのべ300人の若者が登壇し、日本在住の外国人留学生も多数参加するなど、回を重ねるごとに規模を拡大して、このたび節目となる10回目の大会を迎えました。

2023年11月26日に行われたオンライン公開予選には、世界各地から71人が参加。予選を通過したイタリア、マレーシア、中国、台湾、ベルギー、メキシコ、ベネズエラ、ウクライナの留学生など13人を含む34人が本選に臨みました。多言語を駆使して熱く聴衆に語りかけ、瑞々しい感性から生み出されるパフォーマンスは、会場に集まった約1,300人の観客に大きな感動を与えました。今回の大会では、多言語活動の楽しさだけでなく、ホームステイによる国際交流や留学を通じた多様な価値観への気づき、相手のことばを尊重することで得られた異なる文化を受け入れる感覚など、社会が抱える課題に思いを寄せる内容が多くみられたのが印象的でした。



留学で発見した学びの大切さを語る
シルバー賞・増田 心さんのプレゼン

審査は、「自分の多言語体験に基づいた、世界・社会に発信するメッセージを伝える内容であること」「多言語（3つ以上の言語）で母語に偏らず内容が語られること」「誰にもわかりやすくプレゼンテーションが工夫されていること」などを基準として、各分野の有識者や過去の大会出場者を交えた17人の審査員により行われました。その結果、最優秀のゴールド賞に、マレーシアからの留学生で山形県の大学に通うNur Syafiqah Amira Leeさんと、マレーシア在住の大学院生、李 欣洁さんの2人が選ばれました。あわせて、シルバー賞3人、ブロンズ賞5人、審査員特別賞1人も選出されました。



Nur Syafiqah Amira Leeさん

常識はどこで学ぶの？ 文化によって違うっけ？



インターンはスーツで行く、という「常識」を知らなかった私の体験から、自分が普通だと考えていることは、他の人には普通じゃないこともある、ということ伝えたいと思いました。大学の勉強もあったので準備は大変でしたが、皆さんに支えられて受賞できました。本当に嬉しいです。



李 欣洁さん

ひとことで 変わったゾ！



LMPに参加するために日本に来ました。タミル語を話すクラスメートに彼女のことばで思い切って話しかけたら、そのひとことだけで友達になりました。みなさんも勇気を持って誰かに「ひとこと」を伝えてほしいです。大学院では脳の研究をしています。多言語の楽しさを世界中に広げる活動もしてみたいです。

次回のLMPは来春の開催を予定しています。言語交流研究所・ヒッポファミリークラブは、今の社会における多言語教育の意義をより多くの方に知っていただけるよう、今後もLMPを充実させたものにしていきたいと考えています。

▶ 第10回LMPの様子はこちらからご覧いただけます。（特設ページに移動）

<https://sites.google.com/lexhippo.gr.jp/lmp/>

